

# 宇宙の視座

——かくれる善、悪も全部丸見え

水沼文三小説選集

目次

宇宙の視座——かくれる善、悪も全部丸見え……………	3
漱石・夏目金之助の母……………	107
母、生き返った……………	145
あとがき……………	229

# 宇宙の視座

—— かくれる善、悪も全部丸見え

写真うつりのよい人がいる。

本に載っている作家の写真と、目の前にいる方を比べる。どちらも、すてきな人だった。

紀子<sup>のりこ</sup>さんがその女流作家と出会ったのは、市街地のバス停留場であった。バスから降りたAさん、通りかかった紀子さんに、行き先を尋ねたのである。

Aさんはハンドバッグあけ、ピンクのメモ帳とり出す。

「南方500メートルですよ」

その方向、指し示した。

「ありがとうございます」女流作家Aは幅6メートルの通りゆっくり歩いていく。

両側は江戸時代から続いている瓦屋根の商家が真つすぐ数十軒もある。呉服、荒物、薬局、和菓子、洋品、楽器店並んでいる。Aさんは物珍しそうに目を輝かせ、ゆっくり歩いている。近所の十歳前後の子供たち、おにごっこ、なわとび、木製の長方形椅子には小学3年生の女の子2人並び、綾とりして遊ぶ。Aさんふつと立ちどまり、ほほ笑む。ピンク、紫のブラウス姿の2人、あざやかな手の動き、見とれている。

車の行き来はほとんどない。「ちようちよ菜の葉にとまれ……」どこからともなくかすかに響いていた。

2歳くらい女の子と手をつないであらわれた母親がゆっくり歩いている。

女流作家Aと目があった。

「あら、千枝子ちゃん」母親、立ちどまる。

「マリナちゃん」2人は両手をとりあう。

小、中学校の同級生であった。

## 2

「しばらく、何年ぶりかしら……」千枝子の声、うわずっている。

自宅の前だった。江戸時代に使ったと思われる駕籠かこが楼門入り口上部に飾っている。錦でおおわれている外装、色あせていない。日の光に輝いている。その門くぐる。瓦ぶきの倉庫に続く、アスファルトの歩道50メートルほど歩いた。

マリナは緑、紫交じりの紬の和服姿であった。洋間に案内する。ブラウンの椅子、L字形に五

基ならば。テーブルは緑色のガラス張り、さきほど会ったばかり女の子、よちよち歩みより「こんにちは……」あいさつする。

「うわ、かわいい」ひざの上にのせる。

隣家の女の子、ときどき遊びに来るのだ。

きょうの千枝子は紫色のワンピース、腰のまわりに金色のベルト、サンゴのネックレス、かがやいている。

「さきほど門の上ですてきな駕籠飾ってありました。ご先祖の方が使っていたのですか」  
「祖母が嫁入りのとき、使ったのですよ」

「あら、まあ、それにしても何年もたつのに色あせしない。金の飾りもきれいですわ」

「そのころは車はほとんどなし、町はずれはどこもかしこも砂利道、黒、茶色の地面まるだしの道路、あちらこちら走っていたのですよ。その道を駕籠に乗って、この街に嫁いだのですよ」

「おばあさんのお里は……」

3

「ひと山越えた村の農家、ここから20キロはなれたところ……」

「あの駕籠に乗るすてきなお嫁さんだったのでしょね……ぜひ、おばあさんのお里を拝見したいですわ……」

（千枝子さんは作家らしい好奇心を見せはじめた……ご案内しようかしら）そんなことを考える。

マリナ運転の乗用車で、江戸時代から続く瓦屋根の商店街を貫く道路上を走りゆく。10分後、稲穂が頭をたれる黄金色の田園地帯にたどりついた。澄んだ青空、遠く富士山がよく見えた。

間もなく、上り坂になった。

黄葉のブナの茂みがつづいている。車の行き来なし、幅3メートルの山道をゆつくり昇っている。鹿が茂みからあらわれ、すぐ消え去った。小鳥がたえ間なくさえずる。

「ゆりがね温泉」の木の看板があらわれた。

右方に折れ、200メートル走って、その温泉に着く。駐車場は50台分ほどある。3台だけとまっている。

「ここに、露天風呂もあるのよ。カエデの紅葉に囲まれて、静かなところ」

御影石のとび石を歩いていると、間もなく、ケヤキ造りの和風ホテルがあらわれた。

「いらっしやいませ」三十代の紫色の和服姿があらわれた。すらりとしている。

「あら、マリナちゃん」いとこの道子である。

「しばらくでございます」マリナに近寄り握手する。

「温泉に浸りなさい」ブルーのタオル入りの透明なビニール袋を2人に渡した。

道子は更衣室に案内する。松の香りがいっぱい漂っている。

「6カ月前、新築したのですよ」道子がそう説明している。

自動扉があいた。ひろびろした露天風呂である。道子が説明したようにカエデの紅葉、おおむように枝葉をひろげていた。

「うわ、きれいな眺め」2人が温泉に身を浸す。温かみが全身に伝わる。かすかに硫黄のにおい伝わる。枝葉の間から抜けるような青空である。

セキレイのような鳥が一羽、10メートル先の白い岩にとまっている。あたりを見渡したあと、何かにおどろいたように飛び去った。遠く青く緩やかな山脈が浮かんでいた。

「うわ、きれい」2人はそうつぶやき、眺めていた。